

現代青年の意識と行動 —価値意識と自己形成に関わって—

田中麻里
(平成6年9月30日受理)

The Consciousness and Behaviour of Youth in Modern Society —Based on The Consciousness of Value and Identification—

Mari TANAKA
(Received September 30, 1994)

青年とは

人はこの世に生をうけ、人間的・社会的・文化的環境のもとで、適切な学習・教育の過程を経て、幼児期、児童期、青年期といった発達的な諸特徴を持ちつつ発達する。そして身体的にも精神的にもバランスのとれた・人格的に調和のとれたおとなへと成長していく。その成長は決して単純なものではない。それぞれの発達にはそれぞれの発達の段階にそくした特殊な身体・生理・心理的構造が存在し、それが象徴的に行動に現れてくる。⁽¹⁾

青年期とは、この発達の段階において、成長や教育の特殊な段階であるとともに、おとなの社会へおくり出す最終の準備のときでもある。この時期に青年は社会的・知的・心理的・文化的等の価値について、個々の生きた経験に対応しながら行動の方向づけを学んでいく。青年期における様々な経験のひとつひとつは重要なものであり、その後の彼の人格の確立に大きな影響を与えていくものである。

また、青年期には、これまで長い間依存してきた親から分離し、児童期までの自己像を改変して、親の従属物ではない「他ならぬ自分」を見つけ出そうとする努力が行われる。エリクソン (E. H. Erikson) は、これを「アイデンティティー」(identity) と呼び「青年が成就しなければならぬ中心的仕事であると考えられる。すなわち彼がかつてそうであり、また現在なりつつあるものと、それから彼が考えている自分と、社会が認めかつ期待する彼と、これらすべてを統合して一貫した自分をつくりあげることである。」と述べている。⁽²⁾

むしろ、このようなアイデンティティーを確立すると
教職教養科 教育学研究室

いうことは、そう簡単なことではない。やはりそれには準備の期間が必要である。エリクソンは、これを「モラトリアム」(moratorium) として設定することを提案し、青年期の同一性の葛藤を解決する一方法として位置づけた。モラトリアムとは、時間展望を失い自意識過剰に悩み、同一性の確立の困難化に陥っている青年に、社会的な自己を最終的に選択・決定する前に、自らを主体的に試行するという機会(猶予期間)を与え、解決への道を開こうとするものである。⁽³⁾そして青年はこのモラトリアムという猶予期間のあいだに、急速な身体的成長・性的成熟・社会的役割期待などの変化に直面し、さまざまな新しい経験にとまどい、時にはつまづき大きく揺れ動きながら、やがてアイデンティティーを確立していくと考えた。しかし、それがうまくできなかった時、青年はアイデンティティーの拡散に悩み、苦しむことになる。つまり、青年は自分が何者であるかわからなくなり、自分自身の意志でさし止めた課題の選択や決定ができず、躊躇したり放棄するような状態になってしまうのだ。

ところが、現代社会においてこの青年期の発達段階に大きな影響を与える環境が生まれてきている。その一つが高学歴化、晩婚化、管理社会化という社会変化にともなう青年期・モラトリアムの長期化などである。このことにより、青年は複雑な現代社会の中で、おとなとしての自己選択をし、自己定義するまでに必要な知識や技能や教養を身につける期間として、かなり長期化のモラトリアムにならざるをえなくなっている。現代という時代が生んだ、この心理的・社会的にも長期なモラトリアムは、各種の多元化した現代社会において青年の人間形成・価値意識に新たな変化をもたらしているのではないだろう

うか。

本稿では、現代青年の価値意識・態度・行動と性格形成上における諸問題に視点をあて、⁽⁴⁾ そこから見えてくる青年の姿とはいったいどのようなものであるのか、また、これからの青年期教育に必要な課題とはいったい何であるのかを考えてみたいと思う。

1 青年期における価値意識の変容

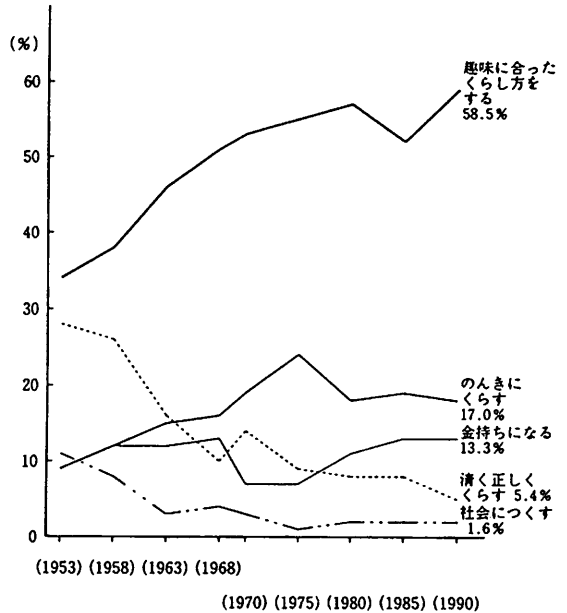
現代の青年は、時代という大きな見えない力に方向づけられている社会・文化・教育環境のもとで育ち、育てられようとしている。当然のことながら、その複雑な社会状況の影響は、青年期の発達や発達課題の達成の現れ方にも大きな変容をもたらし、青年の価値意識や生活態度にも、今までには見られなかった特徴・傾向を生みだしてきている。[冬彦さん、おたく、カルト人間、青い鳥症候群、ピーターパン・シンドローム、チーム、フェミオ君] など、現代青年の特徴的現象を表した造語が頻繁につくられ、マス・メディアに登場していることから理解できよう。

また現代の青年の行動パターン・価値意識を現す言葉は「おきらく」・「そこそこ」というものがある。これは、さまざまな状況や課題に関して、一生懸命取り組むのではなく、気楽にそこそこできればいいのではないかという発想からきているものである。あまり努力はしたくない、でも、失敗もしたくない、かといって完全なる成功も求めてはいない。普通、何かひとつの目標に取り組もうとする時、ある程度は完全なる形というものを追及しがちであるが、彼らにはどうもあてはまないらしい。彼らの行動・態度が意味するものはいったい何であろうか。

現代青年は、常にどこか逃げ道を求めているのではないだろうか。そのことにのめり込んでしまうことへの不安、いつもどこか第三者的に距離を保ち、自己の深層心理が表面化することを嫌う。小此木啓吾氏は、このような価値意識を「新しいモラトリアム心理」と呼び、「何事に対しても、その時その場所における当事者であることを避ける。自分はその時と所であくまで仮の存在であり、「本当の自分」はそっと棚上げしておく。いつでも立場をかえ、考えをかえ、自分自身をも変身させる余地を残しておく。」という解釈・見解を示している。⁽⁵⁾

つぎに具体的に青年の価値意識の形成の過程を時代変化・背景をふまえながらみていきたい。よく知られたデータ⁽⁶⁾ではあるが、価値意識の推移が典型的に表出さ

れていると考えられる「人の暮らし方」について、青年の意識は時代とともにどのように変化したのか、またその要因は何であるのか、考えてみたい。



「人の暮らし方」

戦前は、「清く正しく暮らす」や「社会のためにつくす」といった「社会生活貢献型」が支持されていた。しかし、これらの生き方は減少の一途をたどり、それに対して、「趣味にあった暮らし方をする」「のんきにくらす」といった「安楽型」・「個人生活重視型」が支持されるようになってきた。だが、この変化は、社会状況や当時の教育に起因するところが大きい。戦前の思想統制や勤労・奉仕が義務化された社会状況下では「社会生活貢献型」を選択せざるをえなかったこともあろう。したがって、この考え方は一般の青年の深層心理にどれほど根づいたものであったかは疑問視されるところだが、いずれにせよ、この価値意識によって青年の態度・行動・心理が方向付けられていったことに違いはない。

戦後、日本はそれまでの伝統的な価値を否定せざるおえない状況が生まれ、国民的一致をみていた価値意識は崩壊する。そして、アメリカ文化の流入などにより、それに代わる新しい価値意識「民主主義」が導入された。しかし、この価値意識は現代社会において未だ完全に定

着したとはいいがたいところがある。その結果が、社会的価値・個人的価値といった価値の両端のバランスを狂わせ、個人の権利重視（個人的価値）の意識だけが一人歩きする状況を生みだしてしまったのではないだろうか。そればかりではなく経済的価値に重きをおく生き方が増加し、今日の学校・家庭・社会における諸問題を引き起こす一つの要因にもなっているようにも見うけられる。

すなわち、現代社会全体における価値意識そのものが、個人化の方向にあり、多様且つ相対的なために、こういった環境のもとで青年期をおくる現代青年の多くに、「のんきにくらす」といった「安楽型」の生き型や、「趣味にあった暮らしをする」といった「個人生活重視型」を選択させてしまうのであろう。

言い換えれば、青年期における価値意識の形成は、外的な社会が要求する社会化と、内的な自己形成からなる個人化という矛盾し相反する二つの人間的側面の葛藤を経て形成されていく。社会化が求めているものは社会における共通の価値—文化の受容であり、個人化の求めているものは個性の伸長—自我の形成である。このような過程を経て社会化と個人化のぶつかりあいの末に生まれた価値意識こそが成熟した価値意識であり、それによって青年は選択や評価といった社会的行為に際し自立的な意思決定ができるようになっていくのである。

しかしながら、価値意識の形成は、先にも述べているように社会化と個人化の葛藤の末、統一的に生みだされるものであるからして、社会化が強く影響を及ぼす社会と、弱く影響を及ぼす社会とでは価値意識の現れかたに違いがみられる。戦前の日本社会はこの社会化の過程において国家的にも社会環境的にもひじょうに強い力が加えられていたために青年の価値意識はきわめて同質的なものになっていた。だが、現代の社会には、前述のような強い力も、またそれにとって代わるような新たな概念も存在しない。そのため価値意識は次第に多様・混乱し、個人化にいっそう拍車をかけ、自己中心的・利己的パーソナリティの増大といった方向（極端な個人主義）へ進行していったのではないかと考えられる。

例えば、総理府の⁽⁷⁾によると、「仕事に打ち込んでいるとき」に生きがいを感じるものは二割にも満たない。仕事以外の生活に生きがいを感じているとするもののほうが圧倒的に多い結果となっている。現代の青年は、「個」というものを再優先に考える傾向にあるため、仕事などという社会性を帯びている事柄に対して全面的に

コミットすることが少なくなってきているようだ。このことは、社会的な役割の受容という青年期の課題の達成という観点からすると、未熟・未発達のひとつの現れではないかと考えられる。社会生活をおくるにあたっては、社会の秩序を保ち、個人の社会的役割を認識し、他者とのバランスをとる性格の柔軟性を身につけることが必要不可欠である。ところが、個人的利益（個人主義的発想や合理主義的発想）を追究するあまり、それが一つの妨げとなって、青年の社会意識や社会連帯意識が希薄になってしまっているのではないだろうか。こうした態度は、やがて他人や社会との間に衝突をまねくであろう。この状態を、エリクソンの言葉に置き換えると「発達の危機」(development crisis)⁽⁸⁾なのである。

今日に至るまで、多くの教育専門家が青年の価値の形成にあたっては、適切な発達課題の設定とその達成が、きわめて重要であると述べている。たしかに、青年が望ましい適切な人格を獲得するためには、このことは最も重要な事柄の一つであり、成熟した価値意識がなければ、健康なパーソナリティの形成はなしえない。ところが、現代社会においては、青年は、これらの発達を妨げようとする様々な社会環境の中に置かれる。学歴社会を背景に、受験教育の激化、過当競争、差別、子どもの数の減少による過保護、過干渉、都市化・情報化にともなう人間関係の希薄化、多方面から押し寄せてくる荒波に、翻弄されてしまっているのが実情だ。しかし、どのような環境に置かれたとしても、我々は、成熟した価値意識の獲得をあきらめてはいけない。なぜなら、人間が心豊かに、幸せに生きるためには、青年期における成熟した価値意識の獲得が一つの重要な要素であるからだ。

II さまよえる現代青年

青年期は、人間の生涯のうちで最も不安定で葛藤—危機に満ちており、問題行動が多発する時期である。急激な身体の変化及びそれに対する心理的反応。そしてそこに現れる不安や葛藤が、個々人の発達段階において、さまざまな問題行動・精神病理的問題を引き起こさせてしまう。また、青年期は自我と社会との出会いの時期ともいわれ、個人のニーズと社会からの要求との間で矛盾や葛藤が起りやすく、既成の自己像が脅かされ、いわゆる「同一性の危機」(identity crisis)⁽⁹⁾に見舞われやすい。この最も敏感で不安定な時期に我が国の青年には、受験や進学などという耐え難いほどの重圧がのしかかる。

よりよい成績・よりよい学校・よりよい会社と追い立てられ続け、夢や理想はいつのまにか色あせてしまう。しかも、我が国は、一度つまずいたり、ルールからはずれると、容易なことでは元には戻れない。非常にやり直しのききにくい社会構造なのだ。そのため、精神的な圧迫は一層強いものとなって青年にのしかかり、時には正常な心身の発達を妨げる一因にもなっている。

このような社会環境を背景に、現代の青年には次第に無気力化・引きこもり化が進行し、一部の青年の病理現象を表していたシラケ、三無主義（無気力・無感動・無関心）四無主義（無気力・無感動・無関心・無責任）といった言葉も、今では青年の一般の特徴となりつつある。そして、今日、青年のアパシー化（スチューデント・アパシー・サラリーマン・アパシー）といわれ大きな社会問題になっている。今、アパシー（apathy）という言葉は、無気力症と訳され、医学的な見地からは精神疾患がないにもかかわらず、意欲がなく、何ごとにも無気力・無感動・無関心な精神状態を指す。一般的には青年期（十代後半～二十代初期の段階）に始まるケースが多く、その後放置しておくともアパシーは恒常化し、やがてそれが一つの生き方、果ては人生そのものになってしまう危険性をも含んでいる。このままでは、現代のアパシー世代と称される青年達が、社会を担い、その指導層になるであろう三十～四十年後にはどんな社会状況になってしまうのか、不安は募る。容易ならぬ事態が起こる前に、早急に、何らかの手立てをこうじる必要があるのではないか。これは、深刻な問題なのである。

さて、近年、青年のアパシー化と同様に、発達における社会性の未確立、母性依存、男性性の衰弱、成熟不安・恐怖などの要因が複雑に絡み合った症状、ポスト・スチューデント症候群が、青年学生の新たな病理現象として報告されるようになってきた。主だったものとしては、就職・卒業恐怖⁽¹⁰⁾、卒論・修論恐怖、会食恐怖⁽¹¹⁾ eatなどがあげられるが、“就職・卒業恐怖”に視点をあて、以下ふれてみたい。

“就職・卒業恐怖”とは、学生から社会人へと成長脱皮することをためらい、悩み、強烈な不安や精神的パニック状態におちいり、さまざまな問題行動を引き起こす状態を指す。以前に見られた就職・卒業時における不安というものは、＜就職先があるだろうか＞＜無事単位を取得し卒業できるだろうか＞という取り残されることへの不安にもとづくものが多かった。しかし、今日見られる

ものは＜社会に出てゆくことがこわい＞＜一人前のおとなにみられたくない＞という成熟拒否的な前へすすむことへの不安が主なものである。実際に母親に付き添ってもらわなければ就職活動のできない学生、留年・休学をし就職活動を先伸ばしにする学生、打ち込むものもないのに留学・進学をしづらぶらしている学生が増えている。また、これらの症状が深刻化すると、前へ進む不安と取り残される不安の葛藤の末、うつ状態になったり、死を選ぶケースも少なくない。激しい受験戦争、社会構造の序列化の下、一切の人間の発達を犠牲にして偏差値だけを支えに生きてきた青年にとって、勉学より人間性を問われるということは、自己の存在価値を否定されることにつながってしまうのである。

その半面、前述したような悩める青年の存在とは、全く逆の悩まない青年が、年々、増加している。彼らは自己の生活を幸せと感じ、人生に対する目標も、生きがいももちあわせており、とりたてて大きな不満もないという。しかし、これらの意見が真実でありうるとは、どうてい考えにくく、むしろ、一面的幸せ感のもとに自己を見失った状態と見るべきであろう。

すなわち、現代の青年の生活は、昔とは異なり、直接干渉したり束縛強制し、自由を拘束するなどということとはなくなってしまった。そのため、青年は自分の人生は自分で自由に選択・決定し、自分の幸せ・生きがいのために努力し、充実した生活をおくっていると錯覚しているのである。だが、ここで見落としてはいけないことは、この幸せや生きがい感、決して、内発的な意欲にもとづいた主体的なものではないということである。常に無意識のうちに外界から要求された一定の既成価値や社会の体制や支配機構、既存の規範き自己を同一化させてるにすぎず、結局は、自発的な思考より世論や流行を主とした思考、価値観に、自己を適応させているだけなのである。そして、それらに順応同化することが、おとなになること（一個の完成された人格の社会人）であり、幸せになることだと意識されている。これらの生き方の中には、本来、未来にむけて前途揚々でなければならないはずの青年の姿はどこにも存在しない。

正当な思考力や創造性を育てず、没個性的な人間をつくる、つめこみだけの教育、人間を記憶や知識の量によって選択し価値判断する社会、単なる生活のための手段としての労働、このような社会構造のなかで、青年は自己防衛手段として、現実を直視することを回避し、インス

タント的な充実感をもって満足することを覚えてしまったのではないだろうか。こうしたパーソナリティは今後、一層増幅していくものと考えられ、人間的発達への真剣なまなざしは、今まさに、失われようとしているのである。

上述した悩める青年、悩まない青年、この背反する意味を持つ二つの言葉は、いずれも現代青年の病める・さまよえる・複雑な心象状態を表したものであった。このような状態をそのまま放置しておく、また新たな病理現象が、次々と生みだされ、社会・学校・家庭等は、後に混乱をきわめいくであろう。青年が健全に円満に人間的に発達していくことは、もはや困難なことなのであるか。

しかしながら、どのような状況の下でも、豊かな人間性(望ましいパーソナリティの形成)への志向と努力を、我々は惜しんではいけない。そして、青年に援助の手をさしのべなければならない。それは、青年を人間的脱落の道から救うことのできる、数少ない方法の一つだからである。

青年には、この厳しい現実を克服していく力が、内なるどこかに必ず秘められているはずである。

III 青年の教育と自己形成の課題

青年期における価値意識の変容、それに付随する型で現れてきたさまざまな病理現象は、静かに、深く、そして確実に進行しつつある。今、青年は人間的に生きる方向を見失い、社会と自己に背を向けようとしている。青年がこのような状態から立ち上がり、積極的に生きる力を見出し歩み始めるためには、人間的素質や能力の再発見・本質的な知性と理性の獲得、適切な価値観や態度の形成、すなわち自己実現(self-actualization)の達成をはかってゆくことが必要不可欠である。

マズロー(A. H. Maslow)は、自己実現とは、「自己の素質や才能、能力、可能性の使用と開発であり、自己の資質を十分に発揮し、なし得る最大限のことをすることである。静止せず、到達しきっておらず、常により良い成熟に向かって動いている。その実現化のプロセスは、真の自己の発展あるいは発見、および実在している、あるいは潜在している能力の絶えざる発展を意味している。」⁽¹²⁾とし、自己実現化しつつある人間はすべて、例外なく、自分の体外にある目標を立て、その何者かに従事・専心し、つまらない目標ではなく、本質的・究極

的な価値の追究に専念していると述べている。⁽¹³⁾

そして、自己実現をしている人間の客観的特徴⁽¹⁴⁾として、以下のことをあげている。それらは、まず、現実を有効に認知し現実と快適な関係を保持していること、決して自己の感情や見解におぼれたりせず、正確に物事を判断し、偽者やごまかしを見抜く力にすぐれていること、常に願望や不安、恐れ、期待、誤った楽天主義や悲観主義に乱されることのない認識力を持ちあわせ、決断力に富み、より適切な判断力を有していること、独りよがりな態度、認識ではなく、他者の意見に慎重に耳を傾ける一種の謙遜さを身につけていることなどである。

また、自己実現をする人間は、重要とみなす何らかの仕事、課業、義務、あるいは職業に、例外なく専心しており非常に勤勉かつ一様に創造性に富んでいることも特徴となっている。この場合の創造性とは、柔軟性、自発性、開放性、謙遜性に結びついており、周囲の目にかわりなく、進んで難関に立ち向かうことができる人間性であることを示唆している。

そして、自己実現の人間とは、いわゆる「心理的自由」を確保し、対立や葛藤のなかにあっても、自分自身の判断を下すことができるもので、いかなる環境におかれても、自分の感情や思考を偽ることなく自然で率直な態度を持ちあわせ、自己の持つ価値基準にしたがって行動できる人格のことを指している。⁽¹⁵⁾このような「心理的自由」は人間的成長、自己実現化への一要素として欠かせない重要性を持つものなのである。

さて、青年が青年期の混乱から、このような自己実現への道(自己の可能性の最大限の発展・最善の自己の形成)を一步踏み出すためには、自己実現への理解を配慮にとりいれた適切な援助・指導、すなわち教育が必要になってくると考えられる。人間はすでにできあがったものとして生まれてくるのではない。人間は教育によって初めて人間となることができる。それゆえ、人間は受けた教育によって神にでも悪にでもなりうる存在である。

人間がより人間的になるためには、人間中心の教育が最も重要な事柄の一つであり、それに基づいた人間的諸能力の発達によってこそ豊かな人間性(望ましいパーソナリティ)は、形成される。

そのためには青年は自己をみつめ自己を知ること、アイデンティティーの確立に向かって進んでいかなければならない。そして、我々は、人間形成における青年期の意義を理解し、自己実現への配慮をふまえながら、不安

と葛藤の渦にまきこまれていた青年を側面から援助し、それらを十分に評価できる人間でなければならない。また、人間教育の理念を発展・具体化し、青年期の発達課題にふさわしい教養を身につけた、人間性豊かな青年を育てゆくための教育を充実させていくことも重要ではないかと思われる。

教育の質は、発達途上にある青年の価値意識の形成に多大な影響を及ぼす。それゆえ、それは人間の質へつながってゆくものであり、未来の人間・社会の質にもかかわってくる問題である。その意味において教育は、現代のさまざまな問題を根底から解決していく、数少ない方法のひとつなのである。人間ひとりひとりの発達を軸とし、自己形成の問題を歴史的・社会的現実の中でとらえ直した教育理論の分析・研究・発展をすすめていくことが、これからの青年期における教育に必要なできると考えられる。

そして、いかなる社会状況下にあろうとも、現実と理想の間に大きなギャップをみるとしても、青年が未来への展望を見いだし、そこに自己の生きがいを感じ、課題をもって生きることを認識することができる力を育成したいものである。

むすびに

現在、日本の青年期は問題に充ちている。さまざまな事件、複雑多岐にわたる病理現象は現代青年たちの深刻な葛藤、不安、動揺を対象化させたものであり、価値意識の変容―多様な価値観はこれらの問題を一層わかりづらいものときさせている。

さて、青年にとっての第一の発達課題は、自己を見つめ、自己を知ること。すなわちアイデンティティの確立であることはすでに述べた。だが、このアイデンティティの確立は、本質的には青年自身の自発的自立によるところが大きい。もともと人間は、自己について考えることができる唯一の存在である。人間という存在だけが素質や環境に自分の意思を加えて、「自己形成」へ向かって進んでゆくことができる。青年が、個性を伸ばし、本当の自分として生きるためには、そして「自己形成」へ向かって進むためには、やはり発達段階における発達課題を適切にこなすことが必要であり、今日状況を理解にいたった自己教育とそれへの適切な援助、指導の確立が、今後、検討されていかなければならないであろう。また、現代青年の価値意識がいかなるものかを今少し明

確に分析し、自己実現へむけて、社会の期待や適応への努力と、本質的な自己の欲求との間に調和を達成させることが必要であろう。

こうした視点から、青年期における望ましいパーソナリティの形成―アイデンティティの確立についての研究がすすめられ、いきづまった今日状況に風穴を明けることができれば、現代社会における青年のさまざまな問題は解決の方向に向かうのでないだろうか。

註

- (1) 「教育の段階―誕生から青年期まで」 ドベス (M. Debesse) 堀尾輝久・斎藤佐和訳 岩波書店 1982年 (昭和57年)
- (2) 「アイデンティティ―青年と危機」 エリクソン (E. H. Erikson) 岩瀬庸理訳 金沢文庫 1973年 (昭和48年)
- (3) 同(2)
- (4) 「現代の青少年」 総務庁対策本部編 大蔵省印刷局 1992年 (平成4年) 1953年～1968年 (昭和28年～昭和43年) は統計数理研究所調査
- (5) 「モラトリアム人間の時代」 小此木啓吾 中央公論社 1978年 (昭和53年)
- (6) 同(4)
- (7) 同(4)
- (8) 「自我同一性」 エリクソン ((E. H. Erikson) 小此木啓吾訳 誠信書房 1973年 (昭和48年)
- (9) 同(8)
- (10) 「就職恐怖・卒業恐怖の研究」 山田和男 弘前大学・文部省 1985年 (昭和60年)
- (11) 「会食恐怖の研究」 山田和男 筑波大学刊 1986年 (昭和61年)
- (12) 「完全なる人間―魂のめざすもの」 マスロー (A. H. Maslow) 上田吉一訳 誠信書房 1964年 (昭和39年)
- (13) 「人間性の最高価値」 マスロー (A. H. Maslow) 上田吉一訳 誠信書房 1973年 (昭和48年)
- (14) 「マスローの心理学」 ゴーブル (F. G. Goble) 小口忠彦監訳 産業能率大出版部 1972年 (昭和47年)
- (15) 同(11)

参考文献

「現代青年の悩み」 津留宏 西兵直喜著 大日本図書

現代青年の意識と行動

- 1968年(昭和43年)
「改訳 青年期」ドベス(M. Debesse)著 吉倉範光訳
文庫クセジュ 1969年(昭和44年)
- 「生きがいの創造」藤原喜悦編 大日本図書 1970年
(昭和45年)
- 「現代青年心理学講座 第3巻」依田新他編 金子書
房 1973年(昭和48年)
- 「日本青年の意識構造—不安と不満のメカニズム」松
原治郎著 弘文堂 1974年(昭和49年)
- 「自己実現の心理」上田吉一著 誠信書房 1976年
(昭和51年)
- 「自己を見つめる」西平直喜 五味義男著 大日本図
書 1979年(昭和54年)
- 「青年期の不安と成長—自己実現への道」福井康之著
有斐閣新書 1980年(昭和55年)
- 「現代の教育と人間形成—その理想と生きがいの探求—」
下山田裕彦他著 川島書店 1982年(昭和57年)
- 「青春からの出発—人間開放の心理学」原谷達夫 安
藤延男編著 アカデミア出版会 1982年(昭和57年)
- 「成熟拒否 おとなになれない青年たち」山田和男著
新曜社 1983年(昭和58年)
- 「教育の原理Ⅰ 人間と社会への問い」堀尾輝久 松
原治郎 寺崎昌男編 東京大学出版会 1985年(昭和60
年)
- 「性格心理学新講座 第2巻 性格形成」依田明編 金
子書房 1989年(平成元年)
- 「性格心理学新講座 第3巻 適応不適應」福島章編
金子書房 1989年(平成元年)
- 「教育入門」堀尾輝久著 岩波新書 1989年(平成元年)
- 「若者・アパシーの時代 急増する無気力とその背景」
稲村博著 NHKブックス 1989年(平成元年)
- 「変貌する社会と青年の心理」久世敏雄編 福村出版
1990年(平成2年)
- 「スチューデント・アパシー」土川隆史編 同朋舎出版
1990年(平成2年)
- 「青年期の心—精神医学からみた若者」福島章著 講談
社 1992年(平成4年)
- 「人間—その生と形成—文化・社会・学校に関わって—」
川瀬八洲夫著 相川書房 1993年(平成5年)
- 「青春の変貌—青年社会学のまなざし—」岩見和彦著
関西大学出版 1994年(平成6年)

謝 辞

本研究にあたりまして、多大なるご協力、ご指導をい
ただきました教職の諸先生方に深く感謝の意を表します。